

保育園における「気になる子ども」の現状と支援の課題

—足立区内の保育園を対象として—

竹内貞一・坪井寿子・藤後悦子・府川昭世・田中マユミ・佐々木圭子*

Today's Situation and Problems of the Support to "Problem Children"
in Day-care Centers in Adachi Ward, Tokyo

Teiichi Takeuchi, Hisako Tsuboi, Etsuko Togo, Teruyo Fukawa, Mayumi Tanaka, and Keiko Sasaki

要約

保育園・幼稚園では「気になる子ども」という言葉がしばしば使われる。保育者が保育場面で困難や苦痛、不安を感じる子どもを指す言葉であるが、その言葉が指す対象は幅広く、気になる子どもを定義することは難しい。本研究では、足立区と本学の協力の下、区内の公立・私立保育園に対してアンケート調査を実施し、「気になる子ども」の実態を明らかにした。行動面、言語面、社会性・生活習慣など、いくつかの側面に困難を抱えている子どもが、保育者にとって気になる子どもと認識されやすいこと、中でも言葉の発達は、行動面、社会性の面で、保育の困難感に影響を与える要因となり得ること、保育者は、男児よりも女児をより早く気にしはじめることが明らかになった。それらの特徴から、潜在的な要支援児への支援のあり方について考察した。

キーワード

気になる子ども、保育園、特別支援

問題

数年来、保育・幼稚園教育の現場では「気になる子ども」という表現が頻繁に使われるようになってきた。2007（平成19）年度より本格的実施に移された特別支援教育では、発達上の特別な支援ニーズのある児童・生徒に対する個別の支援計画を作成することが求められている。そのために、要支援児を早期に見出し、支援の方法を見極めることが学校教育現場での課題になっている。それに伴い、幼稚園や保育園段階から、児の発達状況や行動特性などについての関心も高まり、保育場面で保育士・幼稚園教諭（以後、保育者と総称する）がその対応に困難感、あるいは懸念を抱く子どもへの関心が高まっていることが背景としては挙げられる。特別支援教育の実施以前から、いわゆる「グレーゾーン・チャイルド」や「軽度発達障害」と呼ばれる子どもたちの存在は知られており、条件が整えば学齢期以降は特別支援の対象児となり得た。ただし、保育者が用い

る「気になる子ども」という言葉は、単に特別支援を要する児を意味するのみではない。なぜならば、「気になる」事柄には、発達上の問題以外にも、様々な含意があると考えられるからである。

久保山・齊藤・西牧・當島・藤井・滝川（2009）は、保育者が用いる「気になる」という言葉の多義性を指摘し、保育者が気にする点を明らかにした。保育者へのアンケート調査の結果、保育者が気にする点は、発達面、行動面、集団行動面、精神的安定、コミュニケーションなど様々であった。その結果、「気になる子ども」という表現は、保育者の主観的な問題意識によるものであって、子どもの側の要因として単一の状態像を示すのではないことを明らかにした。刑部（1998）は、保育における子どもの異質行動と、それに対する保育者の認知が「ちょっと気になる子ども」の存在をますます際立ったものにするとし、保育者側の認識の仕方と関係性の問題として気になる子どもを捉えた。すなわち、発達臨床に関する事柄と、精神保健に関する事柄、あるいは生活習慣および社会性に関する事柄などが複雑に絡み

* 足立区障がい福祉センター「あしすと」

合い、保育者にとっての気になる子ども像を作っていると言える。

「気になる子ども」という表現が多用される背景のもう一つには、「診断」が付いていないが、特別に配慮を要する子どもへのラベリングの問題があると考えられる。保育者は児の問題に気づいてはいるが、人権的配慮などから、保護者にそのことを伝えられず、気にし続けているという現状を反映したものである。保護者が児の問題を受容できない場合、あるいは問題の存在に気づいていない場合がこれに当たる。一度、保護者が児の問題を受容するか、あるいは気づくことによって、専門機関を受診し、診断・判定が下された時点で、児は「特別な支援ニーズのある子ども」となり、もはや「気になる子ども」ではなくなる訳である。「気になる子ども」という表現には、こうした保育者の微妙な立場から生じている面があることも考慮する必要がある。

筆者らの研究グループでは、当大学の存する足立区内の保育園において、保育者が気になる子どもたちをどのように把握し、認識しているのかについて実態を調査し、地域連携の一環として、気になる子どもたちへの早期介入および保育機関への支援の可能性を検討することを目的に研究を行った。

調査

目的

足立区内の保育園において、「気になる子ども」がどのように存在しているのかその実態を明らかにするとともに、保育士が子どもたちのどのような面を気にしているのかを明らかにすることを目的として、アンケート調査を行った。

方法

調査は、足立区の協力の下、アンケート方式で行った。アンケートの対象は、足立区内にある公立・私立の保育園90園とし、2008年10月から12月にか

けて、足立区障がい福祉センター「あしすと」を通じて配布・回収を行った。

アンケートの構成は、(1)園の概要、(2)気になる子どもに関するアンケート、(3)気になる保護者についてのアンケートの三部構成であった。

上記アンケート(1)は、原則として保育園の園長あるいはそれに代わる人による代表記入で行った。調査項目は、(A)職員の年齢構成、(B)平均在職期間、(C)主な退職理由、(D)障害児枠の児の数、(E)保護者の少なくとも一方が外国籍である子どもの数、(F)気になる子どもの集計値、(G)気になる保護者の集計値の計7項目であった。

アンケート(2)は、一人の「気になる子ども」に対して一枚、担当の保育士が直接記入する方式とした。項目は、「気になる子ども」の(a)現在年齢と性別、(b)気になる事柄の種類(複数選択可)、(c)気になる事柄の自由記述、(d)気になり始めた年齢、(e)保護者の認識、(f)専門職との連携、(g)園内支援体制、(h)連携希望専門職種等、の計8項目であった。

結果

本研究は上記(1)および(2)の一部についての報告である。なお、本研究における「気になる子ども」とは、保育の場面で、発達面、生活習慣面、行動面、親子・家族関係、その他の面で、気がかりな点があると保育士が感じる子どものこととし、保育士の主観的判断によった。

アンケートは、90園に配布し、その内、有効回答は73園、回収率は81.1%であった。まず、アンケート(1)から、データ解釈の前提となる事項として項目(A)および(F)について報告する。足立区の公私立保育園の保育士の年齢構成は、20歳代が20%、30歳代が22%、40歳代が29%、50歳代が24%であり、60歳代は5%であった。公立と私立の

間には、年齢構成に若干の差異が存在はするものの、区全体で見ると、若手からベテランまでが数値上バランス良く勤務しているように見える。つまり、保育士の経験値によって全体データが影響を受けている可能性は少ないことを前提とできることが確認された。このような若手からベテランまでの保育士が、「気になる子ども」をどのように見出し、保育に当たっているのかを明らかにすることが、今回の実態調査の中心である。

各園から寄せられた気になる子どもの集計値をグラフとして、Figure 1に示す。

気になる子どもの数は、年齢を追うごとに多くなる傾向を示すこと、気になる観点では、2歳頃から発達面と行動面が突出することが示された。

では、気になる子どもは具体的にどのような様態を示し、保育士はその何を気にしているのだろうか。それを明らかにするのがアンケート(2)における、気になる子ども個別のデータである。アンケート(2)については73園から297件分のデータが集まった。本研究では、このデータの内、上記(a),(b),(c),(d)の集計値・記述内容について検討した。

「気になる子ども」として上げられた総数297名の内訳は、男児は212名(71.4%)、女児85名(28.6%)となり、男児の比率が顕著に高かった。さらに、気になる子ども297名の内、アンケート項目(b)への回答に「行動面」が含まれた子どもは、

239名(80.5%)であり、その内、男児は175名(73.2%)、女児は64名(26.8%)であった。「気になる子ども」全体に占める「行動面が気になる」子どもの割合をFigure 2に示す。子どもの行動面から、保育場面での困難感や不安を感じやすいことが見受けられる。

入園時点ですでに気になる面を持っていた子と、気になり始めた時期が未記入の子を除き、保育の経過の中で、その子の「行動面」を中心に、「気になり始めた」平均年齢を調べたところ、男児が2歳9か月(SD = 13.2)であるのに対して、女児は2歳2か月(SD = 12.6)であり、7か月の差があった。なお、本調査が、「いつ頃から気になり始めたか」と過去にさかのぼって時期を特定させる形式の質問であったため、時期の特定は厳密なものではないことが推定された。そのため、男児・女児間の気になり始めの年齢差については、特に統計的検定は行わなかったが、臨床実感としてはこの差は了解可能である。

保育園ごとに「気になり始める時期」が異なっている例も見られ、全て0歳～3歳までに気になる子どもを見出している保育園がある一方、気になり始めたのが4歳～6歳になってからという保育園も見られた。これは、各保育園の受け入れ可能な年齢(日齢・月齢)が異なっているため、この結果の解釈には慎重を期す必要があるが、「気になり始め」の差

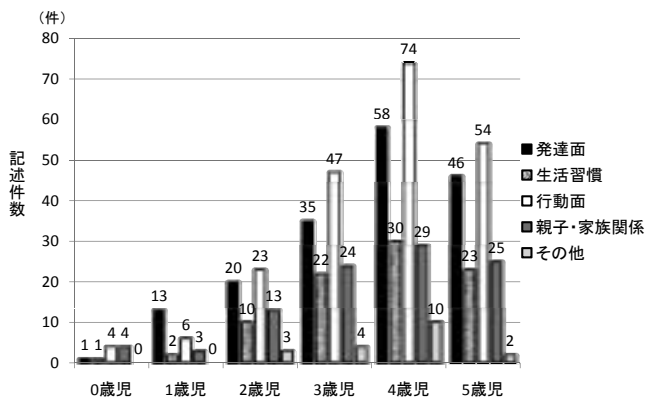


Figure 1 「気になる子ども」の年齢と内容 (件数)

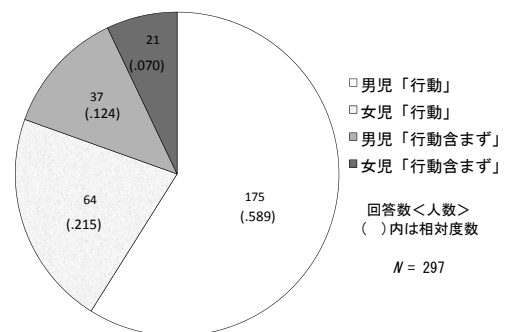


Figure 2 「気になる子ども」全体に占める「行動面が気になる」子どもの割合

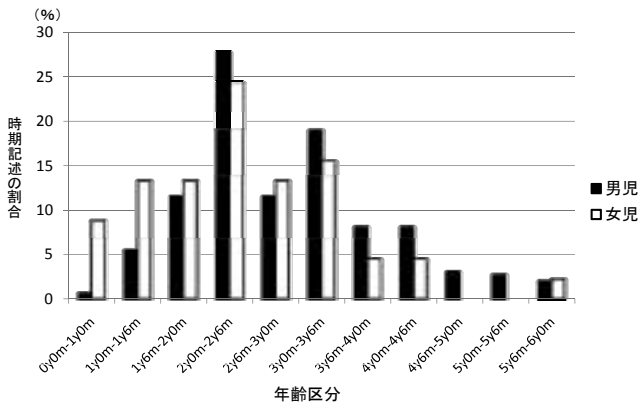


Figure 3 気になり始めた年齢の分布 (%) (男・女)

を生じさせる要因の有無を含め、注目・検討する必要があると考えられる。

「気になる子ども」の行動面に関する自由記述を概観すると、男児・女児とも、「こだわり」、「言語コミュニケーション力の不足から生じる不適応」については、触れられることが多かった。男児については、落ち着きの無さ、乱暴、けんか等のトラブルが多く上げられる一方、女児の場合は、孤立・集団適応困難、わがまま、依存など、対人行動に関する指摘が上がりやすい傾向が見られた。

Figure 1 で見たとおり、「行動面」と同様に、2歳前後から急に気になる観点は「発達面」である。発達面で気になるきっかけが圧倒的に多いのは「言葉の遅れ」である。アンケート(2)の回答においても、言葉に関する記述は多数見られた。低年齢児では、言葉が出ないことなど全般的なことが問題になっているが、発達が進むにつれ、気になる内容が、会話がかみ合わないなどコミュニケーションの働きの言及したもの、さらには社会的行動(集団行動)における言葉の使い方など、より具体的なものが増えていく傾向にあると考えられる。以下、各年齢ごとにいくつかの具体例を挙げながら述べていく。

まず、1歳児では、「喃語も少なく(「あー」「うー」など)笑ったり泣いたりするなどの表情くらいしか見られない(1歳8か月:男児)」のように、喃語か

らどのように言葉につながっていくのかに関する指摘がいくつか見られた。1歳児の言葉における「気になる」件数は少ないが、これについては、気になる子の全体の件数が1歳児では少ないこと、一般的な発達過程として言葉の獲得自体がこれから始まるなどの理由が考えられる。

続いて、2歳児では、「人の名前、物の名称は理解できているが、日常生活動作に関する簡単な動詞等が理解できず、行動がとれない(例「おいで」「すわる」「洗う」等)(2歳3か月:男児)」など、「言葉が出ない」「言葉の理解」などの全般的なものが見られ、言語獲得の初期であることから概ね言葉が発話されていること自体で期待が適っていた1歳児よりも一段高いものが期待されているようである。この頃から、言葉の遅れがだんだんはつきりと認識され、回答に反映されるようになって考えられる。

3歳児では、「話を一方的にして、おしまいになる、おしゃべりは上手である。(3歳0か月:女児)」「言葉が不明瞭で何を言っているのか分からない。また、獲得語彙も少ない(3歳4か月:男児)」「言語面の不明瞭さが目立つ。(五十音の)何行が発音しづらいという訳ではなく全体的に聞き取りづらい(3歳11か月:男児)」のように、分かりやすく伝えるなど、基本的な言葉の発話や理解自体が期待されていた2歳児と比べて期待されるものがさらにもう一段階高くなっている印象がある。さらに言語の不明瞭、会話がかみ合うか否か等、コミュニケーション機能や、言語活動の質的側面に言及したものが増え、言語機能のバリエーションも増えてきているようである。

4歳児では、「指示を言葉だけでは理解できず、行動できない(4歳2か月:男児)」「言葉の発達がゆっくりである。オウム返しの言葉で「いる」「いない」等は言うが、自分からの言葉がなかなか出ない。母親とはたどたどしい言葉で話す(4歳2か月:女児)」や「質問に対して全く違う言葉が返っ

てくる事が多く、又、相手になっている人との同じ話題での会話が成立しにくい(4歳11か月:男児)」などの記述が見られた。これらを見ると、3歳児よりも、さらに場面に応じたコミュニケーションとしてのやりとりが成立しているかに関する記述が多い。

5歳児では、「言葉のボキャブラリーが極端に少なく、会話が続けられない(5歳3か月:男児)」「自分の思いが上手に伝えられない分、他児をたたいたり、つきとばしたり、トラブルが多い。特にサ行の発音が難しい(5歳3か月:女児)」などの記述が見られた。これらは、円滑な社会的行動(集団場面)と、その中で言葉が果たす役割との関係で、言葉の遅れが指摘されるケースが増えていることを示している。

6歳児では、「自分が自分が・・・とまわりの空気が読めず、1人でしゃべり続けることがある(6歳3か月:男児)」「一方的に話すが、質問は上手に答えられない(6歳0か月:男児)」「言葉が乱暴(6歳5か月:男児)」などの記述が見られた。このように6歳児では、より場面に即して適切にかつ双方向での言語コミュニケーションが取れるかどうか気になるとする回答も現れてきている。

以上、簡単に年齢別の特徴をみてきたが、これらをまとめると以下のように考えることができる。これら、言葉が気になる事例を詳細に見ると、言葉の遅れが誘因となり、行動面に不適切さが現れていることが少なくないことが読み取れる。つまり、自分の欲求や気持ちを、適切な言語によって表現できないがゆえに、コミュニケーション行動が拙い、あるいは言語的コミュニケーションの不自由さを、行動で補ってしまうものの、それが適切さを欠いているという場合に、行動面について気になる子どもとして取り上げられた可能性も排除できない。したがって、行動面で気になる子どもと、言語面で気になる

子どもは明確に線引きができない状況にあることが考えられる。

考察

今回得られた結果から、子どもの「行動面」は、子どもの発達と関連して問題視されやすく、しかも男児・女児では、見出される数、気にされ始める時期で差が生じることが明らかとなり、内容にも質的差異が推定される結果が示された。特に、気になる子どもの男女比については、一般的に知られる発達障害児の男女比(5:1)と類似の傾向にあった。また、男児・女児の行動の差異から、女児の行動面は比較的早期に「気になる」のに対し、男児の行動は、「活発さ」を良しとする価値観、男児の言語的発達はゆっくりしているという先入観によって発達の本質が隠され、問題視される時期が遅くなる可能性等を検討する必要があると考えられた。特に、3歳頃まで、女児の言語的コミュニケーション力の発達が男児に比して若干早いことから、女児に不適応行動が生じた際、それに対する言語的制止や説明・説得などの保育者側からの働きかけが奏功しやすい。また、女児の側からの言語的な働きかけで、児の思考や欲求を理解しやすいと言える(e.g. 萩原, 1987)。結果として保育者が女児については、言語的関わりについて期待値が高く、言語的コミュニケーションが十分でない女児は言語面で気になると同時に、行動抑制の困難や集団不適応の面で、より早い段階から気になることが多くなると考えられる。

今回の「気になる子ども」は、あくまでも現場で直接保育に関わっている保育士の主観的見解に基づくものであり、必ずしも発達心理学・臨床心理学的な見立てによるものではない。しかし、自由記述の中には、明らかに自閉性障害や広汎性発達障害を疑わせる記述も少なからず見られた。また、家庭での

不適切養育を背景として精神的な原因から気になる行動を繰り返していると推定される子どもの事例も確認できた。こうした「気になる子ども」を見出したとき、日常の保育の中で、保育者ができることは何であるのかということを考えなければならないだろう。久保山ら（2009）によれば、気になる子どもへの対応について、過半数（56.2%）の保育者が「個別の関わり、声かけ」と回答している。それに続く回答は「けじめ、注意」の10.1%となっている。特に保育園で過ごす「気になる子ども」たちは、こうした対応を受けながら、幼少期の大半を過ごすことになる。そこで、子どもたちの気になる点を客観的に精査し、子ども一人一人に対し「個別の関わり」「声かけ」「けじめ」「注意」といった日常的な対応が適切に行われるようにすることが大切であると考えられる。そのためには、保育者の臨床的資質の向上、あるいは、地域の臨床リソースの積極活用というような複数の対応策が考えられるが、前者は、保育者養成段階からの問題になるため、一朝一夕に実現できることではない。おそらく中長期的課題となるであろう。短期から中期的には、地域の臨床リソースが可能な限り活用され、気になる子どもが、早期に専門的サポートを受けられるような仕組みを検討する必要があると考えられる。

結語

厚生労働省の「子どもの心の診療拠点病院の整備に関する有識者会議」は、第三回審議会において、発達障害、適応困難、不登校などを主訴として、全国の医療機関を受診した子どもの保護者約4,000名を対象にした調査の結果を発表した（藤原・奥山・船橋、2009）。それによると、保護者が子どもの発達や行動を気にし始めた時の児の平均年齢が5.1歳であり、その時から小児精神科など子どもの心や発達に関する診療科を受診するまでに、平均2.2年か

かっている実態を明らかにした。この点から考えさせられるのは、以下の二点である。第一は、5歳の段階で、公的に発達を診断する機会を設ける必要があるという点である。この点については、多くの自治体が必要を感じ始めており、足立区においても五歳児検診などの小児保健施策が準備されている。第二に、まさに保育園・幼稚園の時期に気になり始めても、専門医療機関へ辿り着くまでには2.2年を要するため、受診時には、子どもはすでに小学校に入学しているということである。本研究で明らかになったとおり、日中の多くの時間を児と接する保育者が、支援の必要がある子ども達について「気になり始める」のが平均で2歳代であることを考えると、保護者が気になり始めるよりもはるかに早く、保育園・幼稚園は気づいている可能性がある。であるならば、子どもの育ちの環境を中心に据え、園と専門医療機関をつなぐ機能、保護者と園の間を取り持つ機能、保護者と専門医療機関をつなぐ機能を十全に活かすべく、発達臨床に関与する人材が役割を果たし得るようなシステムの構築が急務であると考えられる。

附記

本研究は、2008年度および2009年度の東京未来大学共同研究費による助成を受けた「保育特別支援研究グループ」による研究成果の一部である。

謝辞

本研究のアンケート調査を行うに当たり、アンケートに丁寧に回答してくださった足立区内の公私立保育園の関係各位に、記して謝意を表します。

参考・引用文献

刑部育子（1998）. 「ちょっと気になる子ども」の集団への参加過程に関する関係論的分析、発達心

心理学研究, 9,1-11

(Gyobu, I. (1998). The transition to participation in a nursery school groups : A relational analysis of a "Difficult" child. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, 9, 1-11.)

久保山茂樹・齊藤由美子・西牧謙吾・當島茂登・藤井茂樹・滝川国芳 (2009). 「気になる子ども」「気になる保護者」についての保育者の意識と対応に関する調査—幼稚園・保育所への機関支援で踏まえるべき視点の提言—, 国立特別支援教育総合研究所 研究紀要, 36,55-76.

(Kuboyama, S., Saito, Y., Nishimaki, K., Touda, S., Fujii, S. & Takigawa, K. (2009). Survey on awareness of and response to "children of concern" and "parents of concern" by preschool teachers and child-care providers: Considerations

in providing organizational support to preschools and child-care centers. *Bulletin of The National Institute of Special Needs Education*, 36, 55-76.)

萩原元昭 (1987). 第4章・言葉の発達 山村貞雄編：日本の幼児の成長・発達に関する総合調査—保育カリキュラムのための基礎資料— サンマーク出版 172-208.

(Hagiwara, M., & Yamamura, S.)

藤原武男・奥山真紀子・船橋敬一 (2009). 患者調査について—患者ニーズに合った子どもの心の診療体制の在り方およびその効果判定の方法に関する研究 (全体調査) — 厚生労働省・第3回子どもの心の診療拠点病院整備に関する有識者会議資料 資料8.

(Fujiwara, T., Okuyama, M., & Funabasi, K.)